

安養寺跡を探る ー寺を囲った大溝ー (解説シート 2)

安養寺を囲っていた大溝については、「明和町文化財解説シート安養寺跡（解説シート 1）」で、幅約 4m、深さ約 2m、東西約 170m、南北約 180mの規模で城の堀のようであったことをご紹介しました。大溝は安養寺が存続していた 13 世紀末～ 16 世紀後半までの内、15 世紀以降に寺の勢力が増していく中で作られたと考えられます。2014 年度の発掘調査で新たに判明してきたことも含め、安養寺の様子を探ってみましょう。

ー大溝を渡る陸橋が見つかるー

2014 年度の発掘調査では、病院の工事に伴う調査と別に、これまでに発見された大溝の位置をもとに、その延長ラインにも大溝が存在するのか確認することを目的に調査を行いました。

調査は、大溝の南辺ラインの中央部分で行いました。寺院の入り口は南に面して作られることが多く、寺のセンターラインにあたる場所であることから、参道や三門が見つかることが期待されました。

調査の結果、大溝の延長部分が見つかるとともに、溝が一部途切れ寺の内部と外部が地続きになっている箇所が発見されました。これは、寺の中心部への入り口となる陸橋であると考えられます。

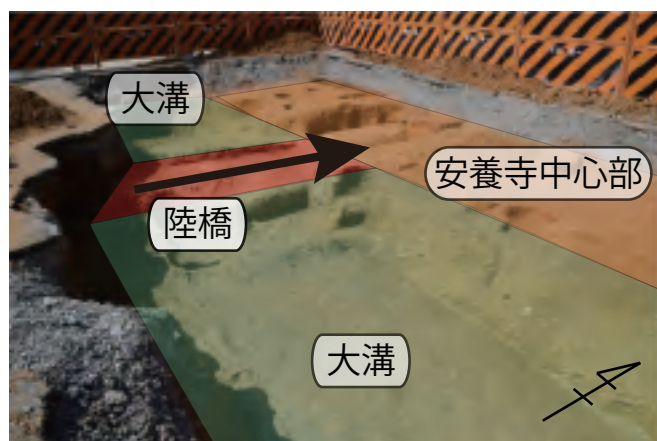
陸橋は、幅およそ 2.5mほどの大きさでした。



星印：陸橋発見箇所
赤線：小字「寺屋敷」の字界
緑線：大溝のライン（実線：調査箇所、破線：推定）

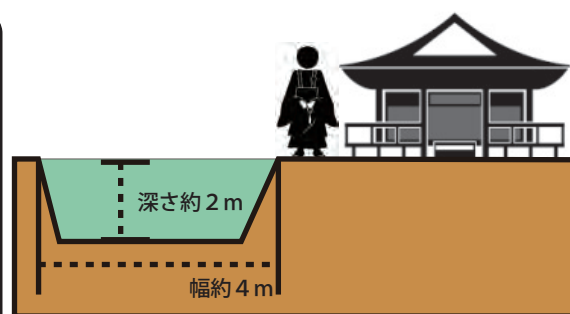


見つかった陸橋（赤塗り部分、北西から撮影）

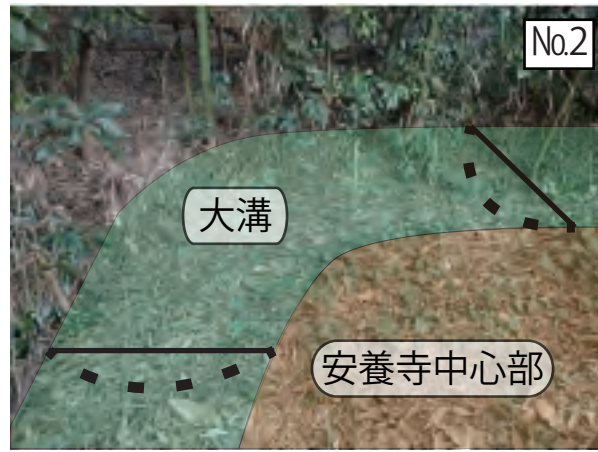
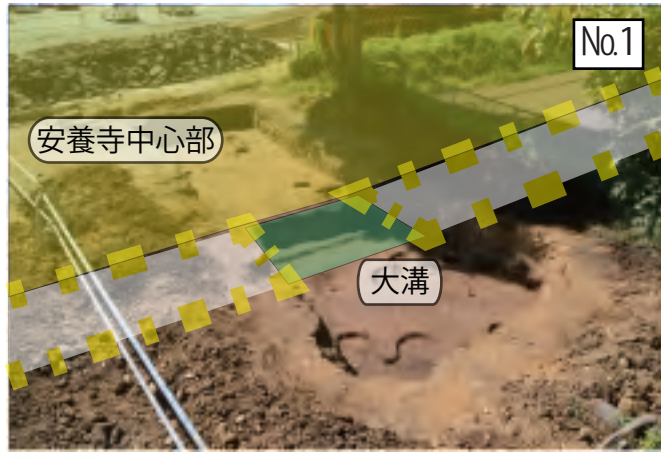


見つかった陸橋（赤塗り部分、南東から撮影）

これまでの調査でも大溝に木製の橋が架かっていたことが分かっていますが、今回見つかった陸橋は、寺のセンターライン付近であることから、重要な入り口であったと思われます。しかし、大溝の規模に対してやや規模が小さく、門などの施設を発見できなかったことから、最も主要な入り口とは断定できません。ただし、橋が寺のセンターラインを意識して設置されていることは、安養寺の建物配置を考える上でとても大きな手がかりとなります。



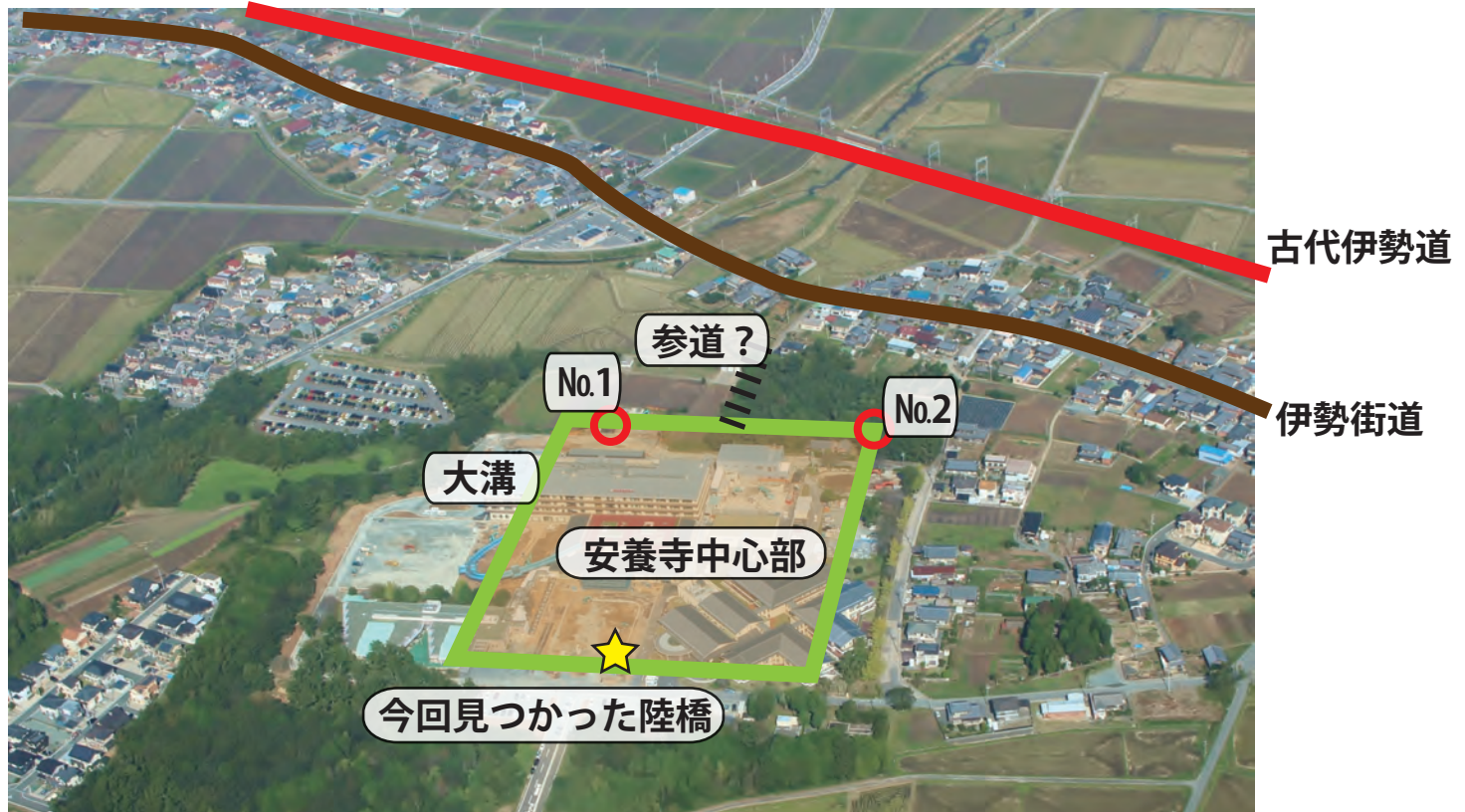
—新たに分かってきた大溝の位置—



(左)
見つかった北辺の
大溝（緑塗箇所、
北東から撮影）

(右)
踏査で見つかった
北東のコーナー部
分（緑塗箇所、西
から撮影）

調査（No.1）は、2013年度の踏査で確認できた大溝北東のコーナー（No.2）から西に延長したラインにあたります。調査では大溝の延長と思われる東西方向の溝が発見できました。このことから、大溝の北限をより確実に押さえることができました。



新たな発見をもとに、安養寺の参道を推定してみましょう。

大溝の特徴の一つは、小字「寺屋敷」の字界と溝のラインがほぼ重なることです。これは大溝が大規模なもので、後世の地割りに影響を与えたからでしょう。このことを踏まえて大溝と字界を比べてみましょう。（表ページ参照）すると北側に溝よりも突出する部分が2ヶ所あることがわかります。その内1ヶ所は大溝北辺の中央付近です。今回見つかった陸橋が寺のセンターラインを意識していたことを考慮すれば、寺に関わる何らかの施設があったために字界も突出しているのかもしれませんが、さらに、もう少し安養寺跡の周辺をみると、古代伊勢道や近世伊勢街道といった主要な道路が寺の北側を通っています。

以上のことを総合的に考えると、安養寺への最も主要な入り口は大溝の北辺中央部分にあり、街道から寺への参道があったのではないかと考えられます。ただし、これはまだ仮説の段階であり、今後のさらなる調査による新たな発見が待たれます。